



公共政策研究分野 年度始め会 (2022)

研究室メンバー

※ 2023年3月末日現在

スタッフ：

武藤 香織 (分野長)、井上 悠輔、李 怡然、永井 亜貴子、
木矢 幸孝、渡部 沙織、原田 香菜、亀山 純子、河村 裕樹、竹内 君枝、
神原 容子、山西 たか子、藤澤 空見子、西村 奈津子、河田 純一

大学院生：

飯田 寛、高嶋 佳代、楠瀬 まゆみ、北林 アキ (新領域創成科学研究科 博士課程)
佐藤 桃子、河合 香織 (学際情報学府 博士課程)
松山 涼子 (新領域創成科学研究科 修士課程)

「2022年度」を振り返ってみました

武藤 香織

今年度(2022年度)は、新領域創成科学研究科修士課程の大学院生として松山涼子さん、特任研究員として原田香菜さんを迎えました。松山さんは、エコチル調査での同意撤回をめぐる課題に取り組むことになりました。原田さんは、幹細胞研究のプロジェクトで、不妊当事者へのインタビュー調査、説明補助資料の改定などで活躍され、早稲田大学法学部の講師としてご栄転が決まりました。また、学術専門職員の藤澤空見子さんがエルゼビア・ジャパン株式会社にご栄転されます。藤澤さんは、AMED「患者・市民参画(PPI)ガイドブック」(2019)制作をはじめとするPPI関連の研究活動に大きく貢献してくれました。お二人のご活躍を祈念いたします。

今年度は、新領域創成科学研究科の内山正登さんがヒト受精卵へのゲノム編集の規制と市民の態度に関する研究で、また飯田寛さんが生命保険と労働分野における遺伝情報に基づく差別禁止に関する研究で、それぞれ学位論文を執筆され、博士号を取得されました。

新型コロナウイルス感染症対策に関与する生活は4年目に入りました。緩和策の導入にあたって、8月に記者会見を開き、1月に研究仲間と意見書を提出したことが印象的でした。また、超党派議連によるゲノム医療と差別禁止に関する法案をめぐるロビイング活動、難病の全ゲノム解析等実行計画でのPPI活動から学ぶことが多かったです。知らない世界がまだまだある！

井上 悠輔

今年度は、「コロナ」の影響を受けつつも、対面での授業や学会発表、国内の移動の制限の緩和に伴う、出張・見学やヒアリングの実施など、ここしばらくできていなかった取り組みができるようになりました。ただ、出張先によって、たとえば、置かれているパーティションや消毒管理に大きな差があったりします。感染症や対策そのものについて、多様な受け止め方が存在し、国内で併存していることを感じる機会でもありました。

今年度は、まず『相談事例から考える研究倫理コンサルテーション』の出版(医歯薬出版社)、夏からは厚労省の研究班の活動(臨床研究法や再生医療等に関する審査体制の検討)、秋は感染症関係の講演・疫学倫理をめぐる翻訳企画の始動など、重要な活動がそれぞれの節目でありました。来年度以降も続く重要な取り組みばかりです。

博士課程の北林さんは、今年初めての学会発表でした。複数の患者さんのグループを対象としたヒアリングも終わり、いよいよ博論提出に向けて邁進していただきたいです。

次年度は、デジタル倫理をめぐる諸課題、疫学倫理をめぐる書籍出版などを予定しています。発展途上の科学的知見をもとにした社会的な意思決定、個人と集団との関係のあり方など、生命倫理にとっても大きな宿題に引き続き取り組むことになりそうです。

再生医療研究における倫理課題 最終年度を迎えて

AMEDの再生医療実現拠点ネットワークプログラム(再生NWP)再生医療の実現化支援課題「再生医療研究とその成果の応用に関する倫理的課題の解決支援(通称:倫理課題)」はR4年度に最終年度を迎えました。倫理課題では、再生医療の研究開発にともなう生命倫理やELSIの課題を調査研究し、再生NWPの研究者が円滑に研究開発を行えるように支援を行ってきました。倫理課題の活動には、①倫理支援、②倫理教育、③調査研究の3つの柱があります。

③の調査研究では、研究目的でヒトの受精卵(胚)を体外で14日を超えて培養することを禁止する「14日ルール」の見直しの可能性について、市民や研究者、患者や不妊治療当事者を対象に意識調査やフォーカスグループインタビューを実施しました。また、

再生医療の患者・市民参画の課題、細胞提供の無償原則やヒト受精胚利用の課題についてもそれぞれメンバーが研究に取り組みました。また最終年度の締めくくりとして、2022年11月には公開シンポジウムも開催しました。シンポジウムでは幹細胞研究者、ELSI研究者、細胞提供側である不妊治療当事者がパネルとして参加し、これまで社会的な議論が進んでこなかったヒト受精胚を用いた研究のあり方やISSCRガイドラインで見直しが見込まれた14日ルールについて対話の場を設けました。本事業はこれで一区切りですが、培った伴走型支援のあり方やELSI研究の種は今後もバトンをつないで大きく育てていきたいと考えています。(渡部)



患者・市民参画の推進に励んだ3年間

日本医療研究開発機構「治験・臨床研究の質の向上に向けた国民の主体的参加を促すための環境整備に関する研究」(日本医師会)の分担研究課題「治験・臨床研究における患者・市民参画を推進する手法の確立」(東京大学)はR4年度に最終年度を迎えました。本課題で、3年間取り組んできたことを振り返りたいと思います。

本課題は、3つの柱をもとに活動を進めてきました。1つめは、普及啓発です。ラジオ形式の研究会「みんなのラジオPPI」を継続的に開催し、多様なステークホルダーと共に、患者・市民参画について議論しました。2つめは、ガイダンスの作成です。2019年に刊行された「PPIガイドブック」を補う資料の作成を

進めてきました。3つめは、教育コンテンツの作成・試行です。患者・市民参画の底上げを目指したe-learningコンテンツの構想、作成に取り組んできました。

患者・市民参画の黎明期の中では、手探りやチャレンジの多い3年間でしたが、その模索こそが楽しく、学びも本当に多かったです。この3年間を糧に、これからも、多様なステークホルダーが協働して進めるヘルスリサーチ・ヘルスケアに尽力していきたいです。(藤澤)



死後の脳研究とパンデミック

ブレインバンク(脳バンク)の活動に10年前ぐらいから関与しています。拠点となる医療機関・研究機関をつなぎ、活動のネットワーク化をはかることに主眼があります。今はこうした体制の充実に加え、評価・情報の項目の標準化といった課題に挑んでいます。「遺体」研究は、正確には「被験者保護」のテーマとして扱われることは少なく、国の倫理指針でもほとんど言及がありません。遺体の取り扱いに関する法律は今から70年以上前のものであり、今日直面している課題への対応には古すぎ、現場では当事者間の理解

と信頼に依拠してゼロから取り組んでいる状況があります。コロナ禍の影響は、ブレインバンクのあり方に大きく影響しています。当初は、病原体に対応するための装備が、解剖の担い手に十分になく、解剖自体の実施が危ぶまれていました。パンデミックが長期化する中、患者さん本人と家族がブレインバンクについて語り合う機会、医師が遺族に説明し承諾を得る機会を得ることが難しくなり、やはり解剖の件数に大きく影響しています。当該活動が、多様な人間関係のつながりで支えられてきたことを思うと同時に、こうした関係が随所で寸断されていることに、「コロナ」の影響の多様さを痛感しています。(井上)



NEWS

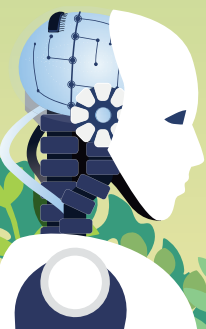
WEBサイトリニューアル報告

研究室開設15年を機に、このたびウェブサイトのリニューアルしました。ホームページに表示されるメインビジュアルは、公共政策研究分野の研究に関わるたくさんのモチーフと、社会のさまざまな人々を、ひとつの線でつなぐイメージのイラストです。つないだ線をよく見ると「elsi」とも読めるようになっていきます。お知らせページからSNSへのシェアもしやすくなりましたので、ぜひアクセスしてみてください。リンクしているPeatixページでは、随時イベント情報もお知らせします。これからも地道に情報を発信していきますのでどうぞよろしくお願いたします。(竹内) <https://www.pubpoli-imsut.jp/>

自転車新調について

10年以上の長きにわたりお世話になった電動自転車が天寿を全うし、秋に二代目を迎えました。目にも鮮やかなオレンジのボディにフレッシュさとやる気を感じます。今後スタッフの足となり、活躍してくれることを期待します!

(山西)

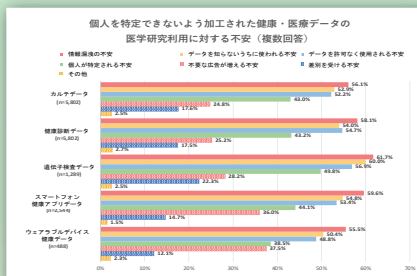




健康医療情報の研究利活用への市民意識調査

医療ビッグデータの利活用の重要性が指摘され、日本でも健康・医療データのクラウドによる共有と利活用が推進されています。他方、クラウドによるゲノムデータや健康・医療データの医学研究利用には様々な倫理的課題が指摘されますが、一般市民への意識調査は殆ど見られません。そこで、デジタルヘルスの基礎的リテラシーを計測するスコア(BLS)を試行的に作成し、2021年3月にアンケート調査を実施しました。

その結果、一般市民のデータ共有への懸念はクラウドが構造的に抱えている問題と重なることや、謝礼がデータ共有の意向(WTSD)に与える影響は限定的で、むしろWTSDとBLSの間に相関があることが認められました。調査結果は論文化し、現在出版手続き中です。調査結果は論文化し、Journal of Human Genome Variationにて公開されました。(楠瀬)



アイヌ民族にゆかりのある土地をたずねて

「日本における先住民族を対象としたゲノム研究の ELSI」をテーマに研究しているため、アイヌ民族に関わりの深い場所を武藤先生、井上先生と訪れました。アイヌ民族を初めて司法の場で認める判決のきっかけになった二風谷ダム(写真)、ウポポイ民族共生象徴空間、平取町立二風谷アイヌ文化博物館などを訪問しました。また、アイヌ研究に携わってこられた方々にご案内いただき、貴重なお話をたくさん聞かせていただきました。

当事者ではない自分が、このテーマを研究することに葛藤があることは変わりませんが、調査の前に出張できたことで、気合を入れ直すことができました。今後は調査を本格化させ、当事者をはじめとしたすべての方にとって有意義な結果を出せるようにがんばります。(佐藤)



ヒト胚の研究利用に関するインタビュー調査

ヒトの受精卵(胚)を体外で14日を超えて培養すること等を禁止する、いわゆる14日ルールが2021年のガイドライン改訂によって禁止項目から外れました。今後の方向性は社会的に議論する必要性が指摘されていますが、実際に人々がどのように考えているかは明らかではありませんでした。そこで2022年9、10月に一般市民と不妊治療経験者を対象に、ヒト胚の14日を超える体外培養をどのように評価しているかを調査しました。肯定的にも否定的にも語られましたが、特に印象に残っているのは不妊治療経験者の胚への思い入れです。胚を自分の子と認識されていたことは非常に勉強になりました。最後になりましたが、本調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。(木矢)



遠足復活！～日本橋エリアで社会科見学～

公共政策研究分野の恒例行事には「遠足」があります。遠足では、研究室や日常の研究から少し離れて、関心がある施設を訪れつつ、メンバー間の交流を図っています。COVID-19の影響で以前のような遠足ができていなかったため、今年は久々の遠足となりました。今回は、メインツアーで「分身ロボットカフェ DAWN ver.β」、オプションツアーで「保護猫カフェたまゆら」、「アーティゾン美術館」を訪れました。分身ロボットカフェでは、分身ロボット「OriHime」の接客を体験しながら食事をいただいた後、「OriHime」のパイロットの方々にインタビューをさせていただきました。インタビューでは、カフェで働くことになったきっかけや趣味のお話などで盛り上がり、あっという間の30分でした！来年の遠足も楽しみです。(永井)



論文報告 主なものを掲載

Inoue Y. Relationship between high organ donation rates and COVID-19 vaccination coverage. Frontiers in Public Health 2022 Apr;10(855051):1-6.

Inoue Y, Masui T, Harada K, Hong H, Kokado M. Restrictions on monetary payments for human biological substances in Japan: The mu-shou principle and its ethical implications for stem cell research. Regenerative Therapy 2023; in press.

Ri I, Kawata J, Nagai A, Muto K. Expectations, concerns, and attitudes regarding whole-genome sequencing studies: a survey of cancer patients, families, and the public in Japan. J Hum Genet 2022; https://doi.org/10.1038/s10038-022-01100-6.

Hideki Yui, Kaori Muto, Yoshimi Yashiro, Saori Watanabe, Yukitaka Kiya, Kumiko Fujisawa, Kana Harada, Yusuke Inoue, Zentaro Yamagata. Survey of Japanese researchers and the public regarding the culture of human embryos in vitro beyond 14 days. Stem Cell Reports; doi:10.1016/j.stemcr.2023.02.005

Kitabayashi A, Inoue Y. Factors that Lead to Stagnation in Direct Patient Reporting of Adverse Drug Reactions: An Opinion Survey of the General Public and Physicians in Japan. Therapeutic Innovation & Regulatory Science 2022; 56(4): 616-624.

永井亜貴子, 李怡然, 藤澤空見子, 武藤香織. 地方自治体における COVID-19 感染者に関する情報公表の実態: 2020年1月~8月の公表内容の分析. 日本公衆衛生雑誌 2022; 69(7): 554-567.

木矢幸孝. 遺伝学的リスクの意味づけに関する別様の理解可能性. 保健医療社会学論集 2022; 33(1): 56-65.

木矢幸孝. 「告知しうる側」はどのような配慮を行っているのか?: 遺伝学的リスクに関する告知と非告知の共通項に着目して. 保健医療社会学論集 2023; 33(2): 60-69.

[http://www.pubpoli-imsut.jp/news?SEARCH\[cat_id\]=5](http://www.pubpoli-imsut.jp/news?SEARCH[cat_id]=5)

論文詳細はこちら



修了生より

このたび遺伝情報に基づく差別禁止に関する論文で博士の学位を取得いたしました。過去の議論や経緯を明らかにし、新しい知見を加える難しさとダイナミズムを経験しました。指導教員の武藤先生をはじめ多くの方に感謝いたします。今後は実際に社会に貢献できれどと考えています。(飯田)



高校教員と博士課程の両立に苦労した6年間の末、学位を取得することができました。ヒト受精卵へのゲノム編集をテーマにしましたが、博士論文の執筆を通して、改めて学校教育の役割についても考える機会となりました。今後はこれまでの学びを学校現場に還元したいと思います。(内山)



分野長 武藤香織



井上悠輔

メンバー近況



仕事関係での様々な機会に感謝するとともに、学業との調整に苦戦した一年でもありました。次年度は社会人と学生の立場をバランスよく保てるよう心がけていきたいです。(高嶋)

今年度は講義でデータサイエンス、科学コミュニケーション、質的調査法、院生ゼミでプロジェクトマネジメント等を学ぶ貴重な年でした。来年度からは博論に向けて頑張りたいと思います。(楠瀬)



職場で部署異動があり、環境の変化への対応に苦心した1年でした。博士課程も終わりを掲げる時期に差し掛かり、やるべきことが山積して焦りますが、できることから一つ一つこなしていきたいです。(北林)



現地開催の学会が復活したこともあり、国内外の色々な場所に行き、刺激を受けることのできた年でした。現在の研究テーマに移って早1年半、来年度は論文発表や博論調査を進めていきたいです。(佐藤)



アカデミアとジャーナリズムをどう繋ぐかに関心があります。まずは隗より始めよ、自らの研究と仕事でそれを模索してみたいという目標が。そのためにも博士2年はもっと研究に力を注ぎたいです。(河合)



今年度があっという間に終わってしまい、残り1年の修士生活となりました。発表や学会参加の機会を多くいただきたくさんの経験を積むことができました。引き続き修士論文に尽力していきたいです。(松山)



4年ぶりに現地開催の国際学会に参加し、忘れかけた移動の大変さも、同じ空を共有する価値も実感した1年。大学院時代の学びが今になって生きることが多く、初心に立ち返って歩みたいです。(李)



温泉好きの娘の影響で、最近は週末にスーパー銭湯で温泉に浸かって癒やされています！今年は、娘と一緒に、夏はプール、冬はスケートに行き、ちょっと運動不足が解消されたような気がします・・・。(永井)



社会学が積み上げてきた研究の偉大さを改めて認識した一年だったように思います。あの当時にこの人はここまで考えていたのか、と。私もできる範囲でもう少し頑張りたいと思います。(木矢)



しばらく塩漬けにしていた博士論文がようやく公刊されます。慌ただしさの中で複数の研究の種を蒔き、水をやって育てることの凡庸な大変さを感じた年でした。いつも新しい種を蒔き続けられる者でいたいです。(渡部)



新しい環境の中で、調査やヒアリング・学会参加などを通して色々な場所を訪れ、多くの方と出会い、初めての知識に触れ、たくさん語りました。同時に、勉強不足を痛感し、「もっと知りたい」と思う場面も多数で、自分史上最も充実した一年でした！(原田)



R4年度より公共政策研究分野の一員となりました。実生活の諸々要件に追われつつ、いかにして研究の時間を捻出するか。今は、その構想のみで一日の大半を過ごすという奥義(?)を修得しております。(亀山)



最近の水分補給は、特に健康志向ではなく飲みやすいものを試行錯誤した結果、もっぱら「お湯」になりました。白湯といえば古畑任三郎の笑わない女(沢口靖子)回ですが、自分で選べばお湯は結構美味しいです。(竹内)



3年前、ある地域猫に出会いました。毎日のように会いにいらしたら、ニャーと返事をして近寄ってくれるようになりました。世知辛いご時世、小さな幸せにありがたみを感じます。(神原)



旅はいつもテーマを決めて計画。ここ数年は建築巡りが多かったけれど、推しの聖地巡りなる新たなテーマに心躍らせています。そろそろ久しぶりに海を渡りますかねえ。(山西)



今年は、2名いる我が家のねこ達の距離が縮まり、最高5cmまで近づいて寝ようになりました！私含め3人並んで日向ぼっこできるようになり、春の日差しがより嬉しい今日この頃です。(藤澤)



新小1の次男は、新生活に目を輝かせつつも、不安の方が大きい様子。「小1の壁」という言葉がありますが、壁は回り道してもよし！をモットーに、どっしり構えていきたいです。(西村)



博士論文を提出し、この春、大正大学大学院博士課程を修了いたしました。これをマイルストーンに研究者として一歩一歩進んでいきたいです。(河田)



発行元 東京大学医科学研究所公共政策研究分野

〒108-8639 東京都港区白金台 4-6-1 東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター 3階

研究室 WEB サイト : <https://www.pubpoli-imsut.jp/>

代表連絡先 : pubpoli@ims.u-tokyo.ac.jp